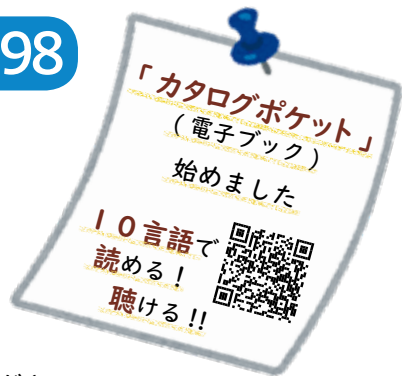


NO.498

人権さんだ



UD FONT
見やすいユニバーサルデザイン
フォントを採用しています。

こんにちは
今日も元気に
自分から

ゆりのき台中学校2年(前年度)
石原 拓翔さん

令和元年度
三田市人権標語入選作品

人権さんだは、みなさんに人権に関する気づきや情報などをお届けします。
新たな発見や共感したことなどを含めてご意見、ご感想を人権推進課までお寄せください。
問い合わせ＝福祉共生部共生社会推進室人権推進課
(559-5148 FAX562-1294 e メールアドレス jinken_u@city.sanda.lg.jp)

前を向いて ～若年性認知症を乗り越える～

いろいろな原因で脳の働きが悪くなり、さまざまな障害が起こり、生活に支障が出てくる状態のことを認知症といえます。認知症は、「もの忘れ」を主体とする誰にでも起こりうる病気ですが、年齢相応の「もの忘れ」とは別のものです。

認知症による「もの忘れ」	加齢による「もの忘れ」
体験全体を忘れる (食事したこと自体を忘れる)	体験の一部を忘れる (食事の内容を忘れる)
ヒントがあっても思い出せない	ヒントがあれば思い出せる
人や時間、場所が分かりにくい (人の顔を忘れる)	人や時間、場所などは分かる (人の名前を忘れる)

認知症の中でも、65歳未満で発症するものを若年性認知症と言います。
今回お話を聞きした古屋一之さん(62歳)は、4年ほど前に若年性認知症と診断されました。現在は、認知症カフェ(※1)に参加したり、積極的に実体験に基づいた講演活動をされています。

※1 認知症の人やその家族の悩みを共有することを目的とした集いの場です。本人、家族だけでなく認知症のことを理解したいと思う人なら誰でも参加できます。

違和感に気づく



▲古屋一之さん

認知症の症状が現れた時は「見えるものが今までと違う」「言語には自信があったのに字が読めない」といった違和感があり、「まわりの人の書く字が汚いのだ」と自分中心に物事を考えてしまうことがしばしばありました。

そんな中、もしかすると何かの病気ではないかと考えるようになったのは症状が現れてからかなり時間が経ってからでした。病院で若年性認知症と診断された時はかなりショックで、なかなか現実を受け入れることができませんでした。

葛藤の中で

勤めていた会社を辞めることになり、家の中で引きこもってしまふことが続きました。そんな中、私を外に連れ出してくれたのは「陶芸」でした。三田には「ふれあいと創造の里陶芸館」があり、いつかは行ってみたいという思いがあったのですが、「病気のことを受け入れてもらえなかったらどうしよう」「黙っていたらどういだろうか」など、さまざま葛藤がありました。しかし、私は昔から陶芸品を見るために旅行に行くほど陶芸が大好きだったので、一度顔を出してみようと決心しました。

居場所がある

何かあった時に迷惑がかかるという思いから、初めて陶芸館に伺った時に病気のことを打ち明けました。すると、「古屋さん、あそこに座っている人いるでしょ。あの人も古屋さんと同じ病気をもちですよ。私たちは大歓迎なので、またぜひ来てください」と言ってもらいました。この時、同じ仲間がいる、初めて自分を受け入れてくれるところができたと感じました。そこから、私は働きに出たり、自らの経験について講演をしたりと少しずつ外に出て活動をするようになっていきました。



▲古屋さんの作品

大切にしたいこと

認知症は、記憶障害など直接的な脳の病気による症状と、周囲の環境や人間関係によって引き起こされる症状の2つに大別されます。特に後者は行動・心理症状と呼ばれ、周囲のサポートで、ある程度の予防や改善が可能です。症状は人それぞれで、全てを忘れてしまうものばかりではありません。夕刻になると落ち着かなくなる症状が顕著に出たりする場合(夕暮れ症候群)もあります。

認知症の人の行動には、必ず理由があります。例えば、認知症の人が自宅にいるにもかかわらず「家に帰る」と外出し、目

勇気を出して

このように周りの人が受け入れてくれることが、本当にありがたいです。家族や周りの人が温かく見守ってくれることが一番の救いになります。私は、たまたま趣味の陶芸がきっかけで外に出ていくことができました。病気を患った方はどうしても引きこもりがちになってしまうですが、勇気を出して人と関わることで、周りの人が外に連れ出すことが大切だと思います。社会に出ることが第一歩。人と繋がることで自分自身を元気にしていきます。必ず、助けてくれる人はいます。私の周りにもたくさん助けってくれる人がいて、本当に感謝でいっぱいです。これから、前を向いて生きていきたいです。

的の家が分からず歩き続けてしまふということがあります。本人に事情を聴くと、幼いころに住んでいた当時の家を思い出して、「家」に帰ろうと歩き続けていたということでした。この行為は、「徘徊」と呼ばれたりします。「徘徊」の意味は「一般に「目的もなくうろろ歩き回ること」と言われていますが、本人にとっては理由も目的もあるのです。古屋さんのご家族や周囲の人が温かく見守ってくれているように、しっかりと話を聞き「どうしてなのか」と本人の気持ちになつて理由を考え、やさしく温かい気持ちで接することが大切です。